「日々の理科」（第 1800 号）　2019,-6,13

「裏磐梯紀行（11）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

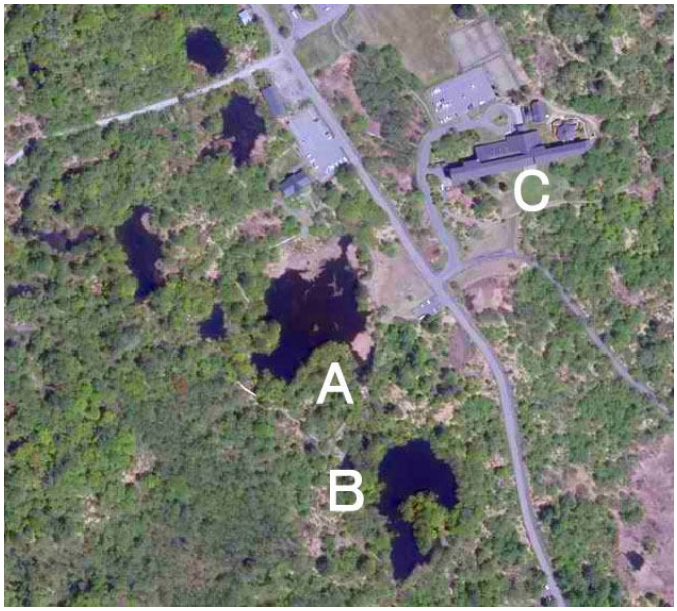
田中　千尋　Chihiro Tanaka

初夏の今の時期、裏磐梯高原ではさまざな花が見られる。道端の野草だけでなく、樹木も花をつけているものが多い。

このカエデは、新緑のリーフ・グリーンが実に美しい。ハウチワカエデ　*Acer japonicum* というカエデだ。本州の亜高山帯に広く分布する種だが、裏磐梯高原ではこのカエデを特によく見かける。

よく見ると、花をたくさんつけている。カエデの仲間は「ムクロジ科」に分類され、ほぼすべてが風媒花である。従って花は目立たず、良い香りもしない。面白いのは、開花した花と同時に、すでに若い果実も見られることだ。カエデの仲間の果実は、竹トンボのような形をしている。「翼果」と呼ばれ、秋に枝から離れる時に、これが回転しながら少し離れた場所まで飛ぶ。いわゆる「フライング・シード（飛ぶ種子）」の一つと言えるだろう。

写真を撮ったり、スケッチをしながら２時間弱。桧原湖の船着き場（カヌー出発点）に到着した。ここで湖を眺めながら一休み。その後時間があまりなかったので、急ぎ別の沼の探勝路も回ることにした。このあたりには、一応名称のある沼だけでも、大小１０ほどが点在している。



（国土地理院提供）

航空写真で見るとよくわかる。Aが「レンゲ沼」　Bが「姫沼」、Cの大きな建物が「裏磐梯国民休暇村」である。休暇村は、以前林間学校にも利用していたことがある。四国のような形のレンゲ沼も、勾玉のような形の姫沼も、更に周囲に点在する湖沼群も、1888 年（明治 21 年）の磐梯山大噴火による「山体崩壊」によって押し出された「流れ山」の凹凸地形の窪地に、水がたまって形成されたものである。沼に突き出した「半島」のような地形は、すべれ「流れ山」の名残ということになる。このような地形の成り立ちを知っていると、探勝路を歩くときに「気づく」ことが多く、疲れも忘れて楽しく歩ける。